

令和元年度第1回大阪府市都市魅力戦略推進会議（議事概要）

日 時：令和元年 8月 20日（火曜日）10時～11時55分

場 所：大阪府咲洲庁舎 45階会議室（大）

出席委員：相原委員、栗本委員、近藤委員、佐藤委員、橋爪委員、溝畠委員（50音順）

オブザーバー：関西経済同友会、大阪商工会議所、関西経済連合会

〔開会・出席者紹介・挨拶〕

〔会長選出〕

○互選により、溝畠委員を会長に選出

〔副会長選出〕

○互選により、佐藤委員を副会長に選出

〔目指すべき都市像ごとのKPIの達成状況〕

○資料3により事務局から説明

〔戦略に基づく都市魅力関連プロジェクトの進捗状況と都市像ごとの施策の方向性評価〕

○資料4、5により事務局から説明

〔今後のスケジュール〕

○資料6により事務局から説明

〔資料3、4、5、6に基づく審議等〕

■相原委員

スポーツ面のKPIについて、ラグビーワールドカップによってこの数字が大きく変わってくる。また、インバウンドが好調でこのあたりがどのように伸びてくるのかも数字に反映されてくると思う。

IRや百舌鳥・古市古墳群もあり、どんどん人が来ると思うので、プロモーター組織がしっかりしているロサンゼルスの取組などを参考にするのも一つの方法かと思う。

■栗本委員

文化面のKPIが目標に達しておらず、ここは大阪が弱く、苦手なところかと思っており、それぞれの施策に関して、大阪人、周辺の関西人、インバウンド含め、イベントや文化に興味があるという方はたくさんリピーターとして来られているが、府民の文化度をどう上げていくかが課題かなと思う。

例えば古墳についても、古墳に関して興味がある方は全国、外国からも非常にたくさん集まってこられるかと思うが、そうでない方が自分の街と古墳の関係について、どのような関係があるのかといった物語、自分との関連といった発信の仕方をしていかないと、たくさん人は来たけれど、隣街に住む府民たちはあまり行かない、という現象が

起きるのではないかと思うので、もちろんハードや案内板の整備も必要ではあるが、そのベースにある、それを「面白い」と思わせる物語をしっかりと発掘してわかりやすく伝えていくことが大切かと思う。

■近藤委員

大阪で学ぶ留学生数は順調に増えてきているところではあるが、個人的には大阪に限らずだが、来年度以降もこの勢いが続くかどうかというと、入管法の改正に関しては、こと留学生数に関してはネガティブに働くのではないかと実は危惧している。留学生数だけを追っていくのではなく、留学生の質や学校を卒業した後の進路ということまで考え、そのあたりを見越したような目標、ビジョンを持つことがこれから的大阪のいわゆるグローバル人材戦略には大事なのではないかと常々考えているところ。

これから先、グローバル人材育成都市という目標を掲げるにあたっては、海外からの優秀な方を受入れ、プラス、大阪の仲間として受け入れるような基盤の整備。それから、そういった方々と共生していくことができる日本人の若者たちの資質作りにうまくフォーカスを当てたような形で施策を作っていくのがふさわしいのではないかと考えている。

■溝畠委員

まず、オーバーツーリズムといった話もあるが、住民の方が充足感を感じているかどうかというところは、あるべき都市像を我々も真剣に考えないといけない。

また、IR や万博を控え、今後、外国人人材というのは量・質ともに必要であるが、どのように確保していくかということについて、留学生の受け入れのことから外国人人材の育成確保含めて、今からしっかりと取り組む必要がある。

大阪は官民を挙げて留学生にきめ細かな取り組みを行うことで、質を上げていくことになるのではないかと思っている。観光局で音頭を取って、府市や関係機関で勉強会を始めているところ。

縦割りではなくて、横串的に連携し、量から質への転換をやっていくことが必要ではないかと思っているところ。参考にしているのは、京都がやっている留学生コンソーシアム。大阪でもそのようなプラットフォームを皆さんと作れればと思っている。

■近藤委員

留学生の受け入れもプラスだが、「大阪グローバル塾」といった事業のように大阪にいる意欲的な若者が海外に出ていきやすい環境を整え、うまくサポートしていくことが出来ると、留学生の受入ばかりではなく、バランスの取れたグローバル人材育成ができるのではないかと思っている。

■佐藤委員

大阪では文化が消費財になっているように感じている。ただ良いもの見せて、それを買え、見に行けという感じだが、文化というのは皆で育てるといったものに、その風向きを変えていかないと豊かにはなっていかないのではないか。

例えば、西宮の芸術文化センターは評判が良いが、それはそこに行くのが、皆にとってすごく楽しいものであるからであり、あそこにすごいものが来るから行くだけではなく、そういうホールを育てるという気持ちでみんな参加しているからだと思う。

■ 橋爪委員

全般の話になるが、我々は果たして世界や日本の中で先を走っているのか、後発なのか。十分にキャッチアップできているのかを考えて、戦略をまとめるといった考えも必要である。

IR の整備、あるいは文化財の利活用などに関しても、我々はあきらかに諸外国と比べて後発である。だからこそ、より良い事業が可能であり、様々な可能性が開かれているという発想に立たなければいけない。

世界ではすでに持続可能な観光とは何ぞやという発想のもと、観光や地域創造の戦略を持つ地域や都市がある。足元のオーバーツーリズム対策も重要だが、それではなく、オーバーツーリズム対策の先にこういった優れた観光都市、文化都市を目指すという次元で施策をすすめることがより望まれる。我々は、そういう分野の戦略性においては、遅れ気味なので、急いでキャッチアップしなければならない。だから、次の戦略では、持続可能な都市魅力創造の在り方が一つの論点であろう。

■ 佐藤委員

観光も新しいフェーズに入ろうとしている時に、若い人の力をいかに活かすかというのが大事じゃないかなと思っている。

若い人達のプロジェクトをいろんな形でサポートするだけでなく、彼らが主役になって責任を負うようなものを入れていった方がいいのではないか。それを年配の人が応援するような、新しい循環の作り方といったものを考えるとみんなが元気になるのではないかと思っている。

■ 橋爪委員

様々な施策があるなかで、メリハリをぜひつけていただきたい。既存の課題で我々がまだまだできていないところはキャッチアップ型で施策を打たなければいけない。いっぽうで、大阪の本質はいかにおもろいか、ユニークかということであるので、他都市の状況を把握したうえで、我々はあえてこの領域に力を入れるという姿勢も求めたい。要は他都市や世界中が大阪のモデルを参考にしてくれるユニークネスを提示しなければいけない。世界の都市間競争にあって、「大阪を見とかんと勝たれへん」といった突き抜けたアイデアを、各施策の中でぜひ考えていきたい。

■ 溝畠委員

IR や万博では、「世界最高水準の国際観光都市」を掲げており、これはどのような風な経済情勢になっても 2025 年という明確な目標がある限りはブレではない施策だと思っておりますので、皆さん共通しているのはそのイメージ、「突き抜けた」というところをどういう風にフォーカスしていくかにかかっていると思っている。

〔挨拶・閉会〕